令和四年度　お茶の水女子大学　文教育学部
学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜
高大連携特別選抜　試験問題　人文科学科

※哲学・倫理学・美術史プログラムを志望する者は、【問題1】を、
比較歴史学プログラムを志望する者は、【問題2】を、
地理環境学プログラムを志望する者は、【問題3】を、
それぞれ解答しなさい。

令和四年度　お茶の水女子大学
学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題
文教育学部　人文科学科（哲学・倫理学・美術史）　小論文

【問題1】

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

おおよそこれまで存在した古今東西のあらゆる民族と共同体において、カミをもたないものはなかった。信仰の有無にかかわらず、大方の人にとってカミはなくてはならない存在なのである。

わたしたちが大切にする愛情や信頼も実際に目にすることはできない。人生のストーリーは可視の世界、生の世界だけでは完結しない。たとえそれが幻想であっても、大多数の人間は不可視の存在を取り込んだ、生死の双方の世界を貫くストーリーを必要としている。

かつて人々は神仏や死者を大切な仲間として扱った。目に見えぬものに対する強いリアリティが共同体のあり方を規定していた。それゆえ、わたしたちが前近代の国家や社会を考察しようとする場合、その構成要素として人間を視野に入れるだけでは不十分である。人を主役とする従来の欧米中心の「公共圏」に関わる議論を超えて、人間と人間を超える存在が、いかなる関係をたもちながら公共空間を作り上げているかを明らかにできるかどうかが重要なポイントとなる。これまでの歴史学の主流をなしていた人間による「神仏の利用」という視点を超えて、人とカミが密接に関わり合って共存する前近代世界のコスモロジーの奥深くに錘鉛を下ろし、その構造に光を当てていくことが求められているのである。

いま日本列島においても世界の各地でも、現実社会のなかに再度カミを引き戻し、実際に機能させようとする試みが始まっているようにみえる。二〇一三年秋、わたしは「介護と看取り」をテーマとするシンポジウムに参加するため北京を訪れた。終了後に、中国のホスピスの現状をみせていただくために万明医院という病院を訪問し、スタッフと懇談する機会をもつことができた。

万明医院では病院の内部に、「往生堂」という名称の一室が設けられ、重篤な病状に陥った患者がそこに運ばれて、親族の介護を受けながら念仏の声に送られてあの世に旅立つシステムが作り上げられていた。敷地内の別の一室では、故人の遺体を前に、僧侶を導師としてたくさんの人々が念仏を称えていた。その儀式は数日間続けられるという。霊安室と死者の退出口を人目のつかない所に設けることによって、生と死の空間を截然と区別する日本の病院を見慣れていたわたしにとって、病院内に生の世界と死の世界が混在するこの光景は、たいへん衝撃的だった。

終末期医療や心のケアに宗教を介在させようとする動きは日本でも起きている。その代表的な運動が、東北大学をはじめ多くの大学で進められている臨床宗教師の育成である。「臨床宗教師」は、キリスト教文化圏における[註]チャプレンに相当する存在で、「被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者」をいう。その育成講座には、仏教、キリスト教、神道、新宗教などさまざまな信仰者が参加している。

宗教者であることが基本的な資格であるが、自宗の優位を公言したり布教や伝道行為を行ったりすることは禁止されている。宗教者としての経験を生かし、相手の価値観を尊重しながら、みずからの病や親族の死などによって心に重荷を負った人々に寄り添い、看取りやグリーフケアを行うことを任務とするものである。東北大学病院緩和ケア病棟など、国公立の病院でも臨床宗教師の採用が進められている。

日本でも中国でも、現代医療のあり方に対する反省に立って、医療の現場にカミを導入しようとする活動が始まっている。最先端の科学技術が君臨する場において目に見えぬものたちがどのような役割を果たしうるのか、今後の動向が注目される。

息の詰まるような人間関係の緩衝材として、新たに小さなカミを生み出そうとする動きも盛んである。一九九〇年代から始まるスピリチュアリティや精神世界の探求のブームは、そうした指向性の先に生まれたものだった。ペットブームもまた人間関係の緩衝材を求める人々の無意識の反映と考えられる。

もう一つ、わたしがいまの日本社会で注目したい現象は、列島のあらゆる場所で増殖を続けるゆるキャラである。もちろんディズニーのミッキーマウスをはじめ、動植物を擬人化したキャラクターは世界中にみられる。しかし、その数と活動量において、日本のキャラクターは群を抜いている。これほど密度の濃いキャラクター、ゆるキャラの群生地は、地球上の他の地域には存在しない。

大量のゆるキャラが誕生しているということは、それを求める社会的需要があるからにほかならない。それはなにか。わたしは現代社会の息の詰まるような人間関係のクッションであり、ストレスの重圧に折れそうになる心の癒やしだと考えている。

ミッキーとハグしたくて、震災後再開したディズニーランドを真っ先に訪れたという類の話はいくらでも存在する。精神的に追い詰められたときでも、他人に心を開き甘えることは容易ではない。しかし、ゆるキャラに抱きつくことならさほど抵抗はない。ゆるキャラとの出会いが、心に溜まった澱を一挙に昇華するカタルシスとなるケースもあるのである。

現代社会におけるゆるキャラは、小さなカミを創生しようとする試みであるとわたしは考えている。この社会からカミを締め出した現代人は、みずからを取り巻く無機質な光景におののいて、その隙間を埋める新たなカミを求めた。その先に生まれてきたものが、無数のキャラクターたちだった。(ア)群生する大量のゆるキャラは、精神の負荷に堪えかねている現代人の悲鳴なのである。

欧米諸国と比べれば、日本列島はいまだに自然とカミと人との連続性、対称性を強く保持する社会である。かつて死者が風になって空中を飛翔する「千の風になって」という歌が大ヒットした。道端には何を祀るとも知れない無数の祠があり、野の花が生けられている。都市のここかしこに神社や祠が残っていて、祈りを捧げる人の姿がある。

東日本の各地にある草木供養塔は、山仕事を行う人々が伐採した草木を供養するために建立したものであり、針供養の行事などとともに、人間と草木・無生物を同じレベルの存在として把握しようとする日本人の発想方法を反映する現象である。しかし、その日本でもカミは着実に存在感を弱めつつある。

二一世紀に生きるわたしたちは、近代の草創期に思想家たちが思い描いたような、直線的な進化の果てに生み出された理想社会にいるのではない。近代化は人類にかつてない物質的な繁栄をもたらす一方で、人間の心に、昔の人が想像もしえなかったような無機質な領域を創り出した。民族差別の言説や弱者へ投げかける罵倒の言葉が、いまネット上に溢れている。

この問題の深刻さは、すでに述べた通り、それが文明の進化に伴って浮上したものだということにある。いまそこにある危機が近代化の深まりのなかで顕在化したものであれば、人間中心の近代ヒューマニズムを相対化できる長いスパンのなかで、文化や文明のあり方を再考していくことが必要である。

わたしは前近代に帰れ、といっているのではない。過去に理想社会が実在した、などといっているのでもない。どの時代を切り取っても、苦悩と怨嗟(えんさ)の声はあった。いまわたしたちが生きる世界を見直すために、(イ)近代を遥かに超える長い射程のなかで、現代社会の歪みを照射していくことの重要性を論じているのである。

これまでの歴史のなかで、カミは人にとってプラスの役割だけを果たしてきたわけではない。カミが人を支配する時代が長く続いた。特定の人々に拭いがたい〈ケガレ〉のレッテルを貼って差別を助長したのもカミだった。カミの名のもとに憎悪が煽られ、無数の人々が惨殺されるという愚行が繰り返されてきた。それはいまも続いている。

人類が直面している危機を直視しながら、人類が千年単位で蓄積してきた知恵を、近代化によって失われたものをも含めて発掘していくこと、それこそがいまわたしたちに与えられている大切な課題なのではないだろうか。

佐藤弘夫『日本人と神』（講談社現代新書）より（一部改変）

註

チャプレン　病院や軍隊など教会外の施設で働く聖職者

問一　傍線部（ア）とありますが、筆者はゆるキャラが必要とされる理由をどのように分析しているか、二百字以内でまとめなさい。

問二　傍線部（イ）の指摘を受けて、筆者が「カミ」と呼んでいるものを私たちは今後も必要とし続けるのかどうか、仮にそうだとすればどのような形が考えられるか、あなたの考えを六百字以内で論じなさい。

令和四年度　お茶の水女子大学
学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題
文教育学部　人文科学科（比較歴史学）　小論文

【問題2】次の文章を読み、**問一**、**問二**に答えなさい。

前に向かって歩くわれわれは、通常、過去を後ろに、未来を前に感じ取る。積極的な未来志向を「前向き」の態度と呼び、「後ろ向き」がその逆の態度を表すように、言語表現においてもおおむね背後を過去に、前方を未来に対応させているようにみえる。ところが、時間の前後関係においては、それとは反対に、現在を視点にすれば、過去がマエ、未来がアトと表現される。視点を過去のあるいは未来の一時点に移しても、その時点までに起こっていることにはマエを、それ以後の事象にはアトを用いている。つまり、表現の上では、発話者の前方に過去の時間が重なり、後方に未来の時間が連なっているかのようなのだ。なぜ、空間的なマエが過ぎ去った時を示し、アトが未来を意味することになるのか。

（中略）

人間は時間の経過そのものを見ることはできない。見えるのは、空間における事象の動きであり、変化である。それゆえ、時間の経過が空間概念（長・短、遠・近）や運動概念（遅・速）で言語表現されること自体は何ら不思議ではない。だが、それにしても、系統の異なる言語が共通して、時間的な過去を空間における「前」に、未来を「後」に対応させるのはなぜであろうか。これについて、リドル・スコットの『希英辞典』（一九六八年版、一二三九頁）には、空間的に「背後に」を意味するギリシア語の副詞オピソー（opisō）が「未来に」を意味する時間的用法に関して、「過去はわれわれの眼前に知られているのに対して、未来は見ることができないがゆえに、われわれの〈背後にある〉とみなされた」と説明されている。つまり、過去は既知ゆえに眼前の事柄として、未来は未知ゆえに背後の事柄として表現されたというのだ。眼前を既知、背後を未知とする、いささか単純に過ぎる言語心理学的な説明の可否はここでは問うまい。ただ、たとえばアフリカ人の時間意識を論じたケニア出身のJ・S・ムビティの次のような言葉に触れるとき、過去をマエと表現するわれわれ祖先たちもまた、かつては、〈過去〉を向いて生きていたのではなかったか、と思わされるのである。

> 西洋人の時間の観念は直線的で、無期限の過去と、現在と、無限の未来とをもっているが、アフリカ人の考え方には実際上なじみのないものである。未来は事実上存在しない。未来の出来事は起こっていないし、実現していないのだから、時間を構成しえないのである。（中略）現に起こっていることがらはもちろん未来をひらくけれども、ある出来事がひとたび起こってしまえば、もはやそのことは未来にではなく、現在と過去に属するのである。だから〈現実の時間〉とは、現在のものと過去のものである。時間は「進む」というよりもむしろ「退く」ものであり、人びとは未来のことを思わず、すでに起こったことがらを思うのである。

もし、過ぎ去った出来事をマエノコトと言い表すわれわれの言語習慣が、われわれの先祖たちのこうした時間感覚を*揺曳しているとすれば、過去をマエと言い表すことの奇妙さの原因は、むしろ、過去から現在を経て未来に直進する直線的時間観のもとで未来を指向するようになったわれわれ自身に求められねばならないだろう。この直線的時間観はおそらく西欧の近代社会の形成と共に立ち現れてきたものであり、数量性と不可逆的な直進性をその特質とする。そして、この直線的時間観の淵源は、多くの識者が多少のニュアンスを変えながら指摘するように、キリスト教からさらにヘブライズムに遡るといわれるのだ。

出典：月本昭男「歴史と時間」（『歴史を問う2　歴史と時間』岩波書店　二〇〇二年）。引用にあたり、省略・改変したところがある。

＊揺曳（ようえい）：ゆらゆらとゆれてなびくこと。響きなどがあとに長く尾をひくこと。また、雰囲気や感情などがあとまで長く残ること。

問一　傍線部「過去をマエと言い表すことの奇妙さ」とはどういうことか。本文の内容に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

問二　本論では、西洋近代の時間観念がアフリカ人の時間意識を通して相対化されている。このように、異なる文化との対比を通して、無意識に常識と考えられてきた事象についての見方を捉え直すことができる事例を取り上げ、六〇〇字以内で具体的に論じなさい。なお、取り上げる事例の時代や地域は問わない。

令和四年度　お茶の水女子大学
学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題
文教育学部　人文科学科（地理環境学）　小論文

【問題3】以下の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

そんなグローバルタウンと化しているニセコだが、足元での家賃高騰は、「安いニッポン」基準で生活する地元住民の生活をじわりと圧迫している。

「高くて住めない」と出ていく若い町民がいる。

「高齢になると家を高く売って便利な札幌に引っ越す人もいる」（50歳の地元男性）

物件だけではない。

「ハンバーガーセット2000円」

「カレー1500円」

中心部の店のメニューはいずれも高く、スーパーに並ぶ「ウニ5万円」を見て驚く日本人観光客もいた。

都内のIT企業で働く男性（39）は2019年、海外拠点から来日した外国人の同僚を連れてニセコに旅行した。その時、居酒屋のラーメンが3000円だったことを覚えている。

「日本なのに高すぎる」

男性の年収は1100万円で、決して低くはない。

それでも「とてもたくさんは来られない」と思った。

だが、安いニッポンに慣れている日本人にとっては高いけれど、その価格は世界標準なのだとも言える。そこに、安いニッポンに慣れて生活することの落とし穴がある。

男性が宿泊したホテルのスタッフはみな日本人だが、客の多くは東南アジアの富裕層だったそうだ。ホテルのバーで、どんどん高級なシャンパンを頼む様子を見た。

その光景はまるで、数年前に自分が東南アジアのビーチリゾートにいた時のようだった。

ニセコには想像を超える外資マネーが舞い込み続ける。

しかし、外国人による固定資産税や旅行消費額など、町に入るお金は増えるものの、地元は手放しで喜べない現実もある。

不動産購入者は海外で暮らすため、物件の運用でもうけたお金は町内で使われない。

観光業の外国人従業員も、夏場は母国に帰って給与を消費する。

「通年でみると、町に入るお金よりも町外の人が手に入れるお金の方が多い」（ニセコ町企画環境課）。宿泊税の導入や通年で定住しやすい制度の整備など検討策も多い。

（つづく）

「世界のスノーリゾートに比べるとニセコは非常に安い。利回りも良くて狙い撃ちされているので、まだまだ（外資系企業の）開発が来るだろう」日本経済新聞の「安いニッポン」連載で、ニセコを取り上げた回が掲載された２０１９年12月11日。

倶知安町議会で女性議員が、記事にあるデータを引用しながら「観光は最大化ではなく最適化を目指すと言われている。町としての指針が必要だ」とただした。

文字一志町長は「全国の観光地でもうけているのは民間のビジネスチャンスを得たところばかりで、深刻な自治体行政も多い。

そんな実態や環境と、国際リゾートや経済的な世界の動きと共存しながら、自分たちの暮らしぶりをどうよくするか考えていきたい」と答弁した。

このまま買われ続けるニセコの将来はどうなっていくのか。

中心部を走っていた高齢のタクシー運転手はつぶやく。

「昔よりマシだ。今から英語も勉強できないけど、（外国人観光客が話す）地名さえ分かれば生計が成り立つ」

近年では長野県白馬村や沖縄県宮古島市などが、①「ニセコ化」してきたと言われている。

②海外マネーに踊ることなく、地域が成長していく青写真を描けるか。

②この問いは近い将来、日本全体の課題としてのしかかる。

出典：中藤玲　「安いニッポン　「価格」が示す停滞」日本経済新聞出版　２０２１年

問一　傍線部①はどういう意味か。本文を参考にしながら、二百字以内で述べなさい。

問二　傍線部②（２行にわたる）に述べられている課題や青写真をあなたはどう考えるか、六百字以内で自由に述べなさい。

前ページの地理環境学の入試問題は、引用文献の版元である株式会社日本経済新聞社の使用許諾を得ております。

また、事前の許諾なく無断で複写・転載などの二次利用を固く禁じます。

令和四年度　お茶の水女子大学　文教育学部
学校推薦型選抜　高大連携特別選抜　試験問題
言語文化学科（日本語・日本文学プログラム）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今わたしの頭を去来するのは、昔話で語られるその「昔」とは、はたして本当に実在したのかという漠（ばく）とした疑念である。過去は実在するのか。これは時間をめぐる哲学的存在論で繰り返し提起されてきた、興味深い思考実験である。いま現在のこの瞬間、わたしはたしかに在る、と一応そう言える（もっとも、映画『マトリックス』[注1]のような世界観に立てばそれさえ疑問に付されることになるわけだ）。わたしが見るもの、聞くもの、触れるものをはじめとするこの世界も在る。では過去のわたし、過去の世界はどうか。わたしが体験したあの旅、あの出会いは今となってはもはやなく、それはただ記憶という心的現象として存在しているだけだ。そのとき撮った写真、捨てずに取っておいたチケットの半券といった証拠物件や、その場に居合わせて体験を共にした人の証言などが、その出会いの事実性を補強しているかのようではある。しかしそれはたんに補強しているだけのことで、旅や出会いがたしかに在ったことを百パーセント証明しているわけではない。

極端な話、ビッグバンから始まって現在に至る歴史の痕跡をとどめたこの宇宙のいっさいが、そこに棲（す）まっている、物心ついた時点から現在に至る記憶をそなえたわたしともども、ほんの五分前に創造された――と仮定してみたらどうか。蓋然性にきわめて乏しい仮定だが、いざそれを決定的に覆す客観的論拠を見出そうとしてもなかなか見出せないことに気づいて、人は愕（がく）然（ぜん）とするだろう。そのあたりの議論はたとえば哲学者の大森荘蔵（おおもりしょうぞう）などがきわめて精緻に展開しているので、ここではその詳細に立ち入る要はあるまい。今確認しておくべきは、わたしの過去はわたしの記憶という心象のうちにしかないという一事に尽きる。

そして、心象でしかないという点に関するかぎり、それは眠っている間に見た夢の記憶とそう大して変わりはしないのだ。思い出と夢――前者はほぼ間違いなく確実に実在したものをめぐる心象であり、後者は完全に非実在のものをめぐる心象であるが、心象でしかないという点では両者は等価である。結局わたしたちは、昨日見た夢を目覚めの後に思い起こすのとまったく同じように、かつて体験した過去を思い起こしているだけではないか。

さらに言うなら、これが老いというものなのかという感慨に通じることでもあるが、過去の体験も、それと現在とを隔てる歳月が長くなればなるほど当然ながらあちこち磨り減って細部がぼやけ、模糊としたものとならざるをえず、そのぶん夢のなかでの体験との近似が強まってゆく。長く生きれば生きるほど、過去はいよいよ夢うつつのような何かと化してゆく。ただし、古い記憶ほど夢に似てくるかと言えば必ずしもそうではなく、老齢に至って、現在時点からはもっとも遠い幼少年期の出来事こそが逆に妙に鮮やかな現実感とともに甦ってくるといった、遠近法の混乱、ないしその再構成があるのは、多くの人々の自伝などで語られている通りだ。

夢のなかでいつも行くある特別な町、何か不思議な美しさに満ちたユートピアのような町があって、そこへの旅を繰り返すごとにその町の細部がますます鮮明になってゆく――よく出来た興趣豊かな短編小説のプロットのような、そんな体験を物語れればいいのにと思うが、残念ながらそうした面白いエピソードの持ち合わせはない。わたしが持ち合わせているのは、同じような場所の出てくる同じような趣向の夢を、何度か繰り返し見たことがあるという体験だけだ。反復によって忘却の淵から辛うじて救われ、記憶のうちに残存して揺らめきつづけているいくつかの断片的な情景があるだけだ。

たとえばどうやらパリらしい町にわたしはいて、どこかへ行こうとしている。その町は地下鉄の代わりに高架線の乗り物の路線網が張りめぐらされており、わたしは街並みを上方から見下ろしながら空中を移動している。都市の交通機関というより、遊園地の上空にしつらえられたちゃちな乗り物のようでもある。どこかの駅で、たぶんダンフェール＝ロシュロー駅で乗り換えなければならないのだが、下界を見下ろしてあのあたりかなどとぼんやり考えているうちに、もうすでに乗り過ごしてしまったようだ。わたしは夕食をとるためのレストランを見つけようとしているらしく、困ったなと思っている。やや時間が経って、と言ってもこれはまた別の機会に見た夢が混入しているのかもしれないが、わたしはいつの間にか乗り物から地上に降り立ち、高架線を支える鉄柱のたもとに立っている。そこに妙にだだっ広いがらんとした広場で、あたりには人っ子一人いない。見上げると高架線のガード天井はわたしの頭上のはるかに高いところにあり、組まれた鉄骨の建築は壮麗な威容を示していて、何かしらエッフェル塔の真下にいるような気がしなくもない。結局、夕飯は食いっぱぐれるほかないのか。

人間が登場する夢――彼ら、彼女らと濃密な交渉が展開される、なまなましい愛憎の絡んだ夢も見ないわけではないのだが、町だの都市だのに関わる夢を思い出そうとしてみると、そこに広がっているのはいつも無人かそれに近いさびしい風景であるようだ。人々が往来していて

も、それは存在感がきわめて薄い、顔のない群衆でしかない。人間絡みのシーンはすぐ忘れてしまう――忘れてしまいたいから、だろうか――というだけのことかもしれない。乗り物がよく出てくるのは、町というものは必ず何がしかの空間の広がりを持っている以上、その広がりを体感するのに乗り物が必要だからなのか。

さびしい気持ちになるために、ただそのためだけに旅に出る。これはわたしにはきわめて自然な振る舞いと思われるが、それがどういうことかをいざ改めて説明しようとすると困惑せざるをえない。ただそうなのだ、それでも納得できなければ西脇順三郎の詩でも読んでみたらどうか、とでも言う以外にどうやらないようだ。西脇は「さびしさ」という感情に、至純の詩の魂、至上の詩の価値を充塡した詩人である。

窓に
うす明りのつく
人の世の淋(さび)しき　（『旅人かへらず』「二」）

影のない曼陀羅(まんだら)の
草の実の
紅の無常
紫の淋しさ
形のわびしさ
山々の枯れ枝にさがる
冬の日にこぼれる　（同「一二四」）

人の世の、また人の生の本質をなすのは「さびしさ」だと考えていたとおぼしい西脇に、わたしは心の底から共感する。日々の生活のさなか、何やかや俗なよしなしごとに追いまくられていれば、それに取り紛れて「さびしさ」など感じている暇はなかろうが、そんなときでも生の最深部の基層をなしているのは実は「さびしさ」にほかならない。たとえ昼の覚醒時には抑圧されて意識の表層にのぼらなくても、眠って見る夢のなかにそれはおのずと滲出(しんしゅつ)してくるだろう。

俗事に追いまくられるのに嫌気がさし、それから解き放たれたいと願うとき、人は旅に出る。

旅の途上で人は、いつの間にか凝り固まってしまっていた決まりきった観念や思い込みを脱ぎ捨て、心も軀も身軽になって、自身の生のその基層まで降りてゆくだろう。そこに滞留している「さびしさ」を、生のままの純粋状態でじかに体感するだろう。旅は、わたし自身の、そして世界それじたいの「さびしさ」に、無媒介的に向き合える得難い機会なのである。そんなとき、この仮初の生のただなか、わたしが仮初に通り過ぎることになった町は、ことごとくさびしい町となるだろう。そればかりか、故郷の町、今現にそこに定住している町さえ実は例外ではなく、その本質においてはやはりさびしい町以外のものではないと気づくことになるだろう。数十年間住みつこうと、知り合いや友だちができようと、それもまた結局は通りすがりの町の一つでしかないのだ。わたしはたんにその町を、数時間、数日ではなく数十年かけて通り過ぎただけのことなのだから。

わが国の古人は「身に染む」という言葉を味わい深い詩語へと精錬し遂げてきた。「秋吹くはいかなる色の風なれば身にしむばかりあはれなるらん」（和泉式部）。「野ざらしを心に風のしむ身哉」（芭蕉）。「さびしさ」が身に染みる。「さびしさ」を身に染みるほどの深さと鋭さにおいて感受する。それはこの世に生を享けたことの意味が閃光のように開示される、恩寵の瞬間にほかならない。そうわたしは思う。

（松浦寿輝『わたしが行ったさびしい町』による。一部改変した。）

注　1　『マトリックス』―仮想現実をテーマにしたアメリカの映画。一九九九年公開。
　　2　ダンフェール＝ロシュロー駅―パリ南部にある駅。

問一　傍線「「さびしさ」を身に染みるほどの深さと鋭さにおいて感受する。それはこの世に生を享けたことの意味が閃光のように開示される、恩寵の瞬間にほかならない」とあるが、筆者がこのように考える理由を説明せよ。

問二　筆者が述べる意味で「さびしさ」を表現した文学作品にどのようなものがあるか、日本の文学作品（時代は問わない）の中から本文中の例以外で具体的な例を複数示して五〇〇字程度で説明せよ。

（問題以上。答案用紙のみ提出のこと）

前ページの日本語・日本文学プログラム試験問題における引用文献の出典の版元は、

『株式会社新潮社』になります。

令和四年度　お茶の水女子大学　文教育学部
学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題
言語文化学科（中国語圏言語文化プログラム）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

『実戦・世界言語紀行』（岩波新書）に記されているように、梅棹さんは、チベット語、モンゴル語、ペルシャ語、フランス語、スワヒリ語、スペイン語と、民族研究で訪れた先の言語をそのつど習得しようと努めた。外国語を学ぶことは母語をよく知ることでもある。彼は、言語をそうした網の目のなかで考えたに違いない。

さて、自分が使う道具をしっかり点検し、必要に応じて改良するという梅棹さんの態度は、言語についても適用された。なにしろ言語とは、民族学者にとって重要な道具であり、さらに論文という手段で研究結果を執筆・公開する学者にとって、最大の道具である。その道具を、もっと使い勝手のよいものにしようと考えるのは、当然のこと――と言いたくなるのだけれど、実際にはそれほど当然ではないようだ。日本語という言語そのものについて、「これで万全か？」と問い糾すこと自体、むしろ珍しいことかもしれない。

よく知られているように、梅棹さんは、日本語表記についてローマ字を使おうと提唱し続けた。要するに、漢字表記を止めようではないかという次第。これは初めて聞くとぎょっとするかもしれない。しかし、明治この方、連綿と議論され続けてきている大きな問題である。そう、大きな問題なのだ。

なぜ漢字を止めようというのか。梅棹さんの議論はさっぱりしている。より正しく、より平明に日本語を表記して、使い勝手がよく、さらには日本語を母語としない人びとにも習得しやすくしようではないか、ということだ。なんなら子どもはもちろんのこと、大人、もっと言えば知識人と呼ばれる人たちに、少しまとまった日本語の文章を音読させてみるといい。きちんと正しく読める者がどれだけいるだろうか。加えて、ワープロやパソコンの日本語入力が発展し、人びとはどうかすると自分では書けもせず、読めもしない漢字を書いて平然としているではないか。それでは、意思疎通のための文章を書き、ことばを使うことはおぼつかない、というわけである。

一理ある。けれども、漢字を止めてローマ字にしてしまえという議論は、いかにも過激だ。私もこの点については、なかなか首肯できない。自分が習い使ってきた漢字かな混じり文というスタイルに、おそらく愛着を覚えているからだろう。しかし、梅棹さんは、「それは古代中国（漢語）かぶれやな」と容赦がない。そして返す刀で、「このまま行くと今度は英語かぶれやで」と斬る。要するに、日本語ローマ字表記化は、脱古代中国、脱英語帝国主義の方策でもあるというのだ。

これについては、人によっていろいろ異論があると思う。私もあれこれ気になることがある。しかし、ここでもまた見誤りやすいことながら、見落としてはいけないことがある。例えば、『日本語の将来――ローマ字表記で国際化を』（NHKブックス）を読み、「とんでもない！」と感じる人もあるだろう。しかし、そこで単に拒絶して終われば、いかにも詮無い。思考停止である。そうではなくて、ここは「ローマ字にするのはどうかと思うけれど、今の日本語表記は確かにまだ工夫の余地があるな。自分ならどうしようか」と考えを進める契機である。第一いろいろ言っても、パソコンやケータイでは、日本語をローマ字入力している人も少なくないだろう。

「現在および未来の日本文明を運転してゆくための道具」として日本語や言語を捉えること。梅棹さんのローマ字文化という提言に賛成するにせよ、反対するにせよ、この問題提起自体は、真剣に受け止める必要がある。

（山本貴光『投壜通信』による）

問一、漢字を使用することのデメリットについて、「梅棹さん」はどのように考えていると思われるだろうか。自分の言葉でまとめよ（二〇〇字以内）。

問二、傍線部(1)「「ローマ字にするのはどうかと思うけれど、今の日本語表記は確かにまだ工夫の余地があるな。自分ならどうしようか」と考えを進める契機である。」とあるが、日本語の表記法にはどのような工夫の余地があるか、具体例を挙げて論じよ（六〇〇字以内）。

注：梅棹　忠夫（一九二〇年―二〇一〇年）……日本の生態学者、民族学者、情報学者。

令和4年度　お茶の水女子大学　文教育学部

学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題

言語文化学科（英語圏言語文化プログラム）

次の設問に英語で答えなさい。答えは答案用紙に記入しなさい。

If you could start any kind of business, what kind of business would you start and what kind of products or services would you like to provide?

令和四年度　お茶の水女子大学　文教育学部
学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題
言語文化学科（仏語圏言語文化プログラム）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

（アミン・マアルーフ著、小野正嗣訳『アイデンティティが人を殺す』による）

【問一】　傍線部の「矛盾した現実」とは何か、二百字以内で説明しなさい。

【問二】　文化の混淆について、あなたはどう思いますか。六百字以内で述べなさい。

令和4年度　お茶の水女子大学　文教育学部

学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題

人間社会科学科（教育科学プログラム）

≪注意事項≫

1　監督者の指示があるまで解答を開始しないこと。

2　試験問題は、この表紙を含めて3ページあります。

3　答案用紙は１枚あります。

4　試験問題および下書き用紙は持ち帰ること。

以下の文章は、2000年代以降に実施されている国際的な学力調査（PISA）で好成績を収めている各国の学校を訪問したイギリス人のある教師が日本を訪問した際に、教育の特徴について考えたことをまとめた文章の一部である。以下の文章を読み、下部の設問に答えなさい。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

出典：Lucy Crehan(2016) *CLEVERLANDS*, London : Unbound, pp.69-73 を一部改変

注：sternly：厳しく　detention：生徒に罰を課す　deliberate：熟慮された　strategy：戦略　prioritize：優先させる
berate：しかりつける　wayward：わがままな　implore：懇願する　naughty：品行の悪い　pernicious：有害な

問１：下線部（あ）（い）を和訳しなさい。

問２：下線部（１）で筆者が指摘する小学校と中学校の違いについて、本文全体を基にして日本語でまとめなさい。

問３：下線部（２）で筆者は日本の中学校における生徒集団の指導方法に賛同できないと述べている。あなたは筆者の立場に賛成か反対か。賛成、反対について自分の立場を明確にし、その理由を日本語で述べなさい。

令和4年度　お茶の水女子大学　文教育学部

学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題

人間社会科学科（子ども学プログラム）

≪注意事項≫

1　監督者の指示があるまで解答を開始しないこと。

2　試験問題は、この表紙を含めて2ページあります。

3　答案用紙は3枚あります。

4　試験問題および下書き用紙は持ち帰ること。

問題　以下の英文を読み、（1）～（3）に答えなさい。
　　答案用紙は小問ごとに分け、それぞれに解答する小問の番号を書くこと。

（1）実線部を日本語にしなさい。
（2）波線部のように、なぜ、a death sentence と言ったのか、説明しなさい。
（3）持続可能な社会に向けて、現代の子どもたちにどのようなことを経験したり学んだりしてほしいと考えるか。本文の内容に関連づけてあなたの考えを述べなさい。なお、子どもたちとはここでは 12 歳以下とする。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

出典：*The Guardian*, 14. Oct. 2021 より一部改変

注　turmoil：混乱、騒動、騒ぎ
　　dawdle：時間をかける、ゆっくり進む
　　ramification：結果、影響、成り行き、細分化、小区分、分派、分枝
　　wiggle：小刻みに動かす、上下に（左右に）振る、小刻みに動く、上下（左右）に揺れる
　　ostensibly：表向きには
　　increment：増大、増加、増加量、増額

令和4年度 お茶の水女子大学 文教育学部
学校推薦型選抜 試験問題
芸術・表現行動学科（舞踊教育学専修プログラム）

I. 下記の文章を読み、設問に答えなさい。

高校のダンスの授業で、5 分のダンス作品を 8 人で創作することになりました。そのクライマックスのシーンでは、10 秒ほどのひとまとまりの動きを 8 人全員のユニゾンで 2 回繰り返すことが決まりました。練習が進み、皆がこの動きのカウントやフォルムを覚え、音楽に合わせて踊ることができるようになりましたが、作品のクライマックスにふさわしい強さが出ないという問題に直面しました。

1) この場合に考えられる原因を 2 つ挙げ、それぞれの解決策にふさわしい活動や作業について具体的な例を挙げながら説明しなさい。ここではひとまとまりの動きそのものは変更しないという条件で考えてください。(30 点)

2) このプロセスを通して、8 人は創作ダンスに限らない、他のスポーツや日々の生活に通じる学びを、どのように得ることが期待できるでしょうか。自分の考えを説明しなさい。(20 点)

II. 次の英文の内容を読み、設問に答えなさい。

1) 下線部を日本語に訳しなさい。(20 点)

2) Industrialization と Modernization によってどのような変化が生じたかを本文の内容に即して述べなさい。(30 点)

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

Masteralexis, L. P. et al. (1998) *Principles and practice of sport management.*（一部改変）

令和4年度　お茶の水女子大学　文教育学部
学校推薦型選抜　帰国子女・外国学校出身者特別選抜　高大連携特別選抜　試験問題
芸術・表現行動学科（音楽表現専修プログラム）

次の文章は、ニューグローヴ音楽辞典における「Sketch（スケッチ）」の項目の記述である。文章を読んで、下記の問いに答えなさない。

この部分に記載されている文章については、
著作権法上の問題から掲載することが
できませんので、ご了承願います。

[1] serial works：特定の音列（row）をもとに作曲された作品。アーノルト・シェーンベルク（1874–1951）の十二音技法による楽曲がその一例。
[2] leaf (plural leaves): a single thickness of paper, especially in a book with each side forming a page.
[3] dismember: divide up

問1　下線部（1）を日本語に訳せ。

問2　下線部（2）に「The characteristics of the sketches themselves are also wide-ranging」とあるが、ベートーヴェンの場合、具体的にどのようなスケッチが存在するか？　本文に即して解答しなさい。

問3　美術の場合、スケッチはそれ自体がしばしば芸術鑑賞の対象になりうる。このことは、多くの美術館において、実際に画家や彫刻家の手によるスケッチが展示されていることからも理解できるだろう。それに対して、音楽の場合、一般的な聴衆はもちろん、演奏家にとってさえ、スケッチそのものが芸術的価値をもつことは稀である。この違いの理由は何であると考えられるだろうか？「美術」と「音楽」という二つの異なる芸術形態のそれぞれの独自性についての考察を通して、この問いに答えなさい。（400〜500字）

出典：
Nicholas Marston, 'Sketch', *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 23, ed. by Stanley Sadie and John Tyrrell: Macmillan, 2001, p. 472.
問題作成のために、部分的に省略ないし体裁の変更を行った。